

当報告の内容は著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：コタキナバル・リエゾンオフィス邦人向け講演会

日時：2018年1月27日（土）15:00-17:00

場所：コタキナバル日本人学校

参加者：30名（講演者含む）

内容；

AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス（KKLO）とコタキナバル日本人会の共催により、現地在住の邦人向け講演会を実施した。冒頭、コタキナバル日本人会理事の井口二郎氏によるご挨拶と KKLO 拠点長の床呂郁哉（AA 研所員）による趣旨説明があった。これに続き、大阪市立大学の祖田亮次氏によって「マレーシア・サラワク州における人——自然関係の変化：災害、プランテーション、保全林」と題する講演が実施された。講演に引き続き参加者との質疑応答も実施した。なお講演内容の概要は以下の通りである。

「マレーシア・サラワク州における人——自然関係の変化：災害、プランテーション、保全林」祖田亮次（大阪市立大学准教授）

マレーシア・サラワク州では、ここ 10 年ほど、異なる分野の研究者が集まり、文理融合型の調査が盛んにおこなわれてきた。内陸に住む多くの民族は、川沿いに居住し、焼畑と狩猟採集を主な生業としながらも、近年ではアブラヤシなどの新しい商品作物を栽培するようになり、労働者としてインドネシア人を雇用する人も現れています。このように、人と自然との関係は大きく変化しつつあり、それと連動する形で、社会的な変化も見られるようになった。そこで、自然科学的な観点から植物相や動物相、地形や気候を観察すると同時に、そうした変化に人々がどのように対応しているのかを社会科学・人文学の観点から調査し、解釈するという必要が生じてきた。

たとえば、川沿いに住む内陸先住民たちは、近年、洪水のパターンが変わったと言う。また、河岸侵食によって多くのロングハウスが崩落する事態を目の当たりにするなかで、周辺の土地開発（木材伐採など）の影響を指摘したり、気候変動との関係について語りたりする一方で、タブーの侵犯や神の怒りなどが要因だとして、神話や伝説のような説明を施したりすることもある。地形学や地球物理学による河川災害の要因説明と、災いに関する現地住民の「語り」は、まったく関係がないように見えて、意外な類似性を持っている場合もある。

一方、サバに遅れてサラワク州でもここ 10 数年でアブラヤシ栽培が盛んになり、環境団体等は自然破壊を厳しく批判している。ところが、村々を訪ね歩いていると、意外な言説

を耳にすることもある。「アブラヤシ・プランテーションができてから、イノシシ猟がやりやすくなった」というものだ。夜になると、イノシシがプランテーションにやってきて、地面に落ちたアブラヤシの実を食べるので、待ち伏せ猟が盛んになった地域もあるようだ。しかし、村人の言説はどこまで信用できるのだろうか。そこで、講演者らは、動物生態学者と一緒に、どのような植生環境でどのような動物が観察されるのかという調査も行ったりしている。人間が改変してきた自然環境を、動物たちもいろいろな形で利用していることが分かってきた。

しかしながら、焼畑や狩猟を行ううえで、やはりこれ以上の環境劣化は深刻な事態を招くと思われる閾値はありそうである。内陸の焼畑民は環境をうまく利用して、集落の森林保全を行ってきたと評価されることも多いのだが、実際には、森林伐採やプランテーション開発の影響を強く受けており、そして彼ら自身による森林開墾と商品作物の導入も進んでいる。そのなかでは、経済優先の態度がとられたり、政治的な駆け引きが行われたり、新たな保全ルールが作られたりして、「伝統」的な自然利用・自然認識とは異なる人-自然関係が見られるようになってきた。

今回の報告では、サラワクの自然をめぐる人々の認識・利用のあり方とその変化について具体例を示しつつ、自然科学者と人文社会学者による共同作業の面白さや難しさについてもお話ししたい。